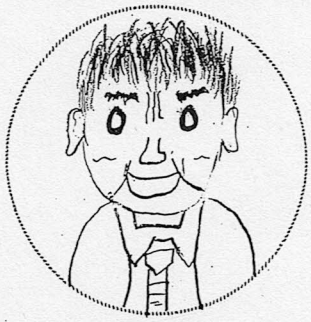
# 学校だより 希望の鐘

ひとつのつぼみはいちどしかひらかない



八戸市立
小中野中学校
平成３０年１０月１０日(水)
No.133 文責：校長 工藤聡


## 最近あった「うれしかったこと」「面白かったこと」

きょうは、記事のスペースの都合で、通常は表に掲載する内容（「活字に親しもう！文章を読もう!!」）を裏にした関係で、いつもであれば裏にしていた「ひとり言」のようなことから始めます。申し訳ありませんが、ご了承ください。

今回は、最近あった「うれしかったこと」「面白かったこと」をいくつか特集したいと思います。

①３年１組の田村日翔里さんが、先週の３日に下長中学校で行われた第66回青森県青少年防犯弁論大会・東部大会（県大会）で、２位にあたる優秀賞を獲得しました。私も聞きに行ったのですが、「すべてのバリアを取り払え」と題して、マイクがいらないほどの声量と、聞いている人を魅了（ミリョウ：人の心を引きつけ、夢中にさせること）する表現力で、堂々と自らの考えを主張しました。田村さんは、９月の八戸市地区大会でも２位となりましたが、昨年のおもに２年生が出場するお話弁論大会でも２位でした。これで３大会続けての２位ということで、これも大変立派なことです。本当におめでとう！

最優秀賞以外の上位入賞者は次の通り。（敬称略）
▽優秀賞＝奥川恋寧（青森市立三内中）田村日翔里（八戸市立小中野中）▽奨励賞＝中村進之介（同市立下長中）嶋村和奏（三沢市立堀口中）村上幸花（平内町立東平内中）

②やはり先週のお昼のことです。私が廊下を歩いていると、ある女子生徒がニコニコと私が見たこともない最高の笑顔で、何かを見ていました。その日の放課後に、「何を見てたの」と聞いたら、あるアイドルの写真でした。「誰？」と聞くと、全く私の知らない人の名前が出てきました。気になってしかたないので、インターネットで調べてみると、数人のグループのうちの一人です。その中の誰かもわからないので、偶然職員室にいた女子生徒の友達を校長室によんで確認しました。私には、それほどカッコイイようには見えなかったので、「これくらいなら、小中野中に20人はいるんじゃないか？」と言うと、その友達は「いるわけありません！」と完全否定しました。そういえば、先日出かけた時に、レジにいた女性を家族が「かわいいわね」と言ったので、あれくらいなら「小中野中に50人はいるよ」と答えました。私としては、心にもない（ココロニモナイ：本心ではない）ことを言ったのではなく、本当にそう思ったのです。年頃のみなさんと、60歳の私（おじいさん）では見方、感じ方がまるで違うのでしょうか。おもしろいですね。

③やはりやはりというか、これも10月３日のことでした。全校朝会の時に、校内合唱コンクールの座席を決めていたのですが、　年　組の　　くんが、すごく落ち着いていました。一番端に座っていたので、「指揮者なの」と聞くと「そうです」という答えでした。しかも、今年は「指揮者賞をとる」と力強く言っています。あまりに自信満々なので「よしっ！じゃあ、本当に指揮者賞をとったら私がお祝いをやるよ」ということになりました。もし、本当に指揮者賞をとったら有言実行（ユウゲンジッコウ：口にしたことは、何が何でも成し遂げること）ということになります。それはそれで素晴らしいことです。ほかの合唱コンをめざしているみなさんも、いよいよ今週です。　くんのように、目標に向かって頑張ってください。

④昨年までの文化祭の「後夜祭」は、今年「前日祭」として行われることになりました。昨年、一昨年と、文化祭の後片付けの後では遅くなりすぎて、帰るのが真っ暗な午後５時半以降になってしまうことと、やはりメインは文化祭ですから、それを最後にしたいというのが主な理由です。何組出てくれるかな…と少し心配していたのですが、だいたい例年くらいの５組が出場してくれるようです。コントあり、ダンスあり、ムービーありの多彩な内容らしいです。今年から、見たい保護者の方々にも公開することにしました。“学校でやっていることで、保護者に見せられないものはあり得ない”という考えからです。興味ある保護者の方々は、文化祭前日（20日・土曜日）の11時30分頃（詳しい時間については、お子さんにご確認ください）、体育館においでください。私も非常に楽しみにしています。特に○○○を！

⑤きょうの私の似顔絵は、　年　組の　　くんに描いてもらいました。布袋寅泰（ホテイ・トモヤス）に似た感じで、迫力があります。みなさんは知らないと思いますが、布袋というのは、カリスマ的なロックミュージシャンでギタリストなのです。私を布袋みたいに描いてくれてありがとう！

小中野中学校だより 希望の鐘 ひとつのつぼみは いちどしかひらかない No.133 平成30年10月10日発行

# 活字に親しもう！文章を読もう！！

『ＮＩＥ（エヌ・アイ・イー）』という言葉があります。これは、Newspaper in Educationの略で、学校などで新聞を教材として活用し、社会性豊かな青少年の育成や活字文化の発展などを目的に、全国で展開している活動です。その一つとして学校に新聞を提供する活動もあります。本校も市教委の予算で、各学級に新聞を入れてもらっています。

『ＮＩＥ』の中に、中学生や高校生が、新聞で報道された記事の中から興味ある話題を選び、それについての意見を投書するというものもあります。東奥日報社が発行している「ＪｕｎｉＪｕｎｉ」という、一週間に一回発行される小中学生向けの新聞に、竹原実裕さん（９／18）、三上菜緒さん（９／25）、安江理歩さん（10／２）のものが掲載されましたので、まずはそれを紹介します。

３人とも、かなり難しい記事を読みながらも、中学生らしい感性で率直な感想を寄せています。大変立派です。東奥日報社の担当者も、３人の文章力に驚いていたということも聞きました。読書もそうですが、活字に親しむことは、①言葉をたくさん知ることができる　②文章を読むことで正しく理解する力がつく　③自分の考えなどを表現する力がつく　④漢字や文法などの力がつく　等の効用（コウヨウ：ききめ）があります。これは、国語の成績アップにもつながる勉強法にもなるようです。私も、小学生の頃から読書をすることが大好きで、今でも好きな作家何人かの本を読んでいます。新聞も、朝５時に起き、30分ぐらいかけて読むことにしています。何ということはありませんが、それでも、読解力や表現力にはなにっているのではないかと思います。もしかするとボケ防止になっているのかも…。みなさんも、ただただゲームをしたり、ユーチューブを見るだけではなくて読書をしたり新聞を読んで、活字に親しんではどうでしょうか。それが国語の勉強になるかもしれませんしコミュニケーション力にもつながるかもしれませんよ。（新聞記事のコピーが小さくてすみません。）

---

八戸市
小中野中３年
竹原　実裕さん

**2018年8月24日付朝刊1面「クマゲラ4年間観測なし 白神の『象徴』どこへ」**

世界自然遺産の白神山地に生息する日本最大のキツツキ、クマゲラ。しかしそのクマゲラが４年間観測されていない。白神山地への入山者が増え、警戒心の強いクマゲラの生息環境を奪った可能性も否定できない。

## 自然保護 身近なことから

白神山地はとても有名な世界自然遺産で、私はそのことをとても誇りに思っている。だから白神山地にたくさんの観光客が訪れてくれることはうれしい。しかし、その一方で国の天然記念物のクマゲラが観測されず、観察を続けているＮＰＯ法人から「このままでは本州から絶滅する」という声も上がっている。

私はこの記事を読み、残念で悲しい気持ちになり、悔しくも思った。私たちの自慢である白神山地には、もっともっとたくさんの人に訪れてほしいし、良さを知ってもらいたいと思っているが、それが警戒心の強いクマゲラの生息を脅かしている可能性があるのも事実だ。だから、どうにかしてこの問題を解決しなければならないと思った。日ごろの生活の中の身近なところで、リサイクルをしたり、節水や節電をしたりと、私にできること、しなくてはいけないことから始めたいと思っている。どこかで地球の役に立つことを信じて。

---

八戸市
小中野中３年
三上　菜緒さん

**2018年8月26日付朝刊22面「東京大会まで2年 パラ競技の魅力もっと」選手6割超 課題指摘**

2020年東京パラリンピックの開幕まで同月25日で２年となった。共同通信がパラアスリート77人を対象にアンケートを行った結果、６割超の選手が「パラスポーツの魅力向上」を課題に挙げた。

## パラ競技の魅力 広まって

この記事を読んで、パラスポーツの魅力がもっと広まってほしいと思った。魅力が広まると、20年のパラリンピックが盛り上がるだけでなく、体が不自由な人たちが生活しやすい世の中になるからだ。

テレビで車いすバスケットボールの番組を見たときに、予想以上の迫力に感動した。その感動を少しでも多くの人に届けるには、どうすればよいか。中学生である私には大きなことはできないが、友達や家族との話の種にすることだけでも、魅力が広まることにつながるのではないか。そして、体の不自由な人たちへの配慮の気持ちも高まるのではないか。一人一人が２年後を意識して行動していけばパラスポーツがメジャーになっていくはずだ。

20年、東京パラリンピックがスポーツ界を超えて、全世界に影響を与え、世界中がバリアフリーになり、思いやりの心であふれることを願っている。

---

八戸市
小中野中１年
安江　理歩さん

**2018年9月14日付朝刊14面「貧困の子供支援 公民館でNPO法人「未来ネット」」**

子供の貧困対策として、地域の公民館を活用して、子供と保護者、地域住民が共に食事を作って交流する取り組みを、ＮＰＯ法人「はちのへ未来ネット」が進めている。

## 食事の場 心にも栄養

この記事を読んで「子供の貧困」の問題があることを知った。その対策で、「子ども食堂」といった、地区ごとに設置され、一人で子供が通いやすい、ボランティアによる食堂が全国で広まっている。私は、このような問題が全国で取り上げられていること、そして、その問題を解決しようと地域の人々が立ち上がっているということを初めて知った。

私の家庭では、家族一緒にご飯を食べている。みんなでしっかり顔を合わせて会話するのは、一日の中でその時くらいだ。そこで私は思った。この問題には、食事に困る子供がいるということだけでなく、家族との会話ができないということもあるのだと。食事の場で私たち子供は、体だけでなく心の栄養をとっているのかもしれない。

地域の人々が私の知らないところで困っている子供たちを支えていることを知り、私もいつか人々のためになる活動をしたいと感じた。